

# 鉄道の鬼

— 故郷に鉄道を走らせた —



## 鉄道開通への挑戦が始まる

鬼北町内にある駅の一つ・近永駅。今では日常的に、当たり前のように利用されているこの駅ですが、この沿線の開通は、「故郷のために」と奔走した一人の熱い思いによって成し遂げられました。それが、当時の好藤村国遠に住んでいた今西幹一郎氏です。

東京、大阪の私鉄の営業を目の当たりにしたことをきっかけに「故郷にも鉄道を」と決心した今西氏。早速、東奔西走して資金を集め、明治26年6月、宇和島と吉野間の軽便鉄道を申請しました。

しかし、その後勃発した日清戦争によって物価が上昇。当初の予算では工事をするのができない状況に追い込まれ、その結果、この鉄道は一度も営業することなく、免許の効力を失ってしまいました。

## 諦めない心、再挑戦

明治33年、郡制施行後、初めて開かれた郡会。そこで話題となったのが「南予の交通をどう発展させるか」という問題でした。

この機会をチャンスと捉えた今西氏は、「四国循環」を目標として掲げ、今度は郡会を動かすことに成功。

交通調査会規則をつくって予算を組み、実際に今の予讃線とほぼ同じ距離の現地調査を行い、鉄道院への申請まで行いました。

しかし、「四国循環」の夢はあまりに遠く、大きすぎるという現実を突き付けられた今西氏。せめて宇和島と鬼北間を結びたいと、明治42年、鉄道会社の設立を決意しました。

しかし、「儲かる事業ではない」と協力者がなかなか集まらず、地元での資金集めは難航。そのため、中央にいる地方出身の有力者から資金を集め、明治44年、「宇和島鉄道株式会社」を

設立しました。

## 立ち足る住民の壁

いよいよ着工となったそのとき、また今西氏の前に壁が立ち足りました。それは、地元住民たちからあがった反対の声でした。

当時は牛や馬などの家畜を飼っている人が多かったため、「汽車が通ること馬や牛が驚いて働かなくなるのでは」と不安になった沿線付近の住民たちが、「うちの地域だけは通さないでくれ」と言い出したのです。



1 現在の近永駅外観。早朝には通勤・通学等で利用する多くの人で賑う。2 好藤村公民館前にある今西幹一郎氏の胸像。その功績が紹介されたパネルも埋め込まれ、その努力が今に伝えられている。